

名言の成り立ち

菅野 義彦*

まだ老成しているつもりはないのですが、それでも医師になって30年経つと、かつて指導をした方に再会することがあります。時々「カンノ先生に言われた名言は今でも覚えています！」などと言ってくれる方もいて嬉しい限りですが、多くの場合その内容を自分で覚えておらず、教えてもらって「ふーん、そうかなあ」なんて心の中で思い返すことになります。私自身も医師になって病棟に出たときに「君たちは医師としては役に立たないか足手まといなんだから、せめて患者さんが入院中に快適に過ごせるようホテルマンとして働け」と言われ、現代ならハラスメントまがいですが、当時は非常に納得してそのように過ごしていた覚えがあります。自分ではこれは教授に言われたと信じているのですが、よく考えると教授が大学院生にわざわざそんなことを言うはずもなく、門下生のどなたかがおっしゃったのかもしれません。そうすると私たちが習ってきた名言にも怪しいものがあるのではないのでしょうか？

先日博物館で、平安時代の高僧が唐へ行きその日記の現物が展示されているのを見て、一千年以上の前の紙が現存しているのに感心しましたが、そのように現物が残っているものは真実でしょう。「芸術は爆発だ！」も私たちの世代は実際に見ていますよね。しかしたとえばナポレオンの「余の辞書に不可能の文字はない」は文書としてはないようですし、「板垣死すとも自由は死せず」も格好良いですが医療者としては刺された人がそんなこと言うかな？ と

* 東京医科大学腎臓内科学分野

穿ったりします。「敵は本能寺にあり」もそうらしいですが、歴史上の有名なセリフはその後の芝居や小説で作られたものが多いようです。そうすると講義などで口を滑らせてとんでもないことを言ったかもしれないと後から怖くなることがありますが、上のように文書に残さなくても、本人の知らないうちに思わぬ名言が生まれるようです。またこの頃は動画や音声を簡単に記録できるようになりましたし、編集や捏造も可能なので、名言よりも暴言、失言が生まれやすくなってしまいました。最近はまだ「医師としては役に立たない」ようですので、現場の職員が快適に働けるようホテルマンならぬフロアマネージャーとして目配りと気配りをしています。